

ベルクソンにおける「質料の創造」の意義

濱田 明日郎 (京都大学)

本発表は、哲学者アンリ・ベルクソンが『創造的進化』(1907,以下 EC)において語る「質料の創造」という観念を扱う。プラトン-アリストテレス的理解における形相質料論においては、質料は創造・生成の「素材」として形相に先在し、形相を「受け入れる」ものである。そしてベルクソンもまた、芸術家のなす作品の創造とは「形相の創造」であって、その質料は先在するのだ、という一般的な形相質料論に則って芸術的創造を語る。しかし他方でこの哲学者は「形相を生み出す行動が単に停止」しただけで「質料」が「創造」される、という事態を語りもする(EC240)。上述の伝統的な形相質料論からすれば、このベルクソンの議論は明らかに問題含みであろう。第一に、この「質料の創造」という逆説的な表現はいかなる事態を指しているのか。第二に、「質料の創造」なる事態と、形相に対する質料の先在性はどのように両立可能なのか。われわれはこれら二つの問いを携えて、ベルクソンが芸術家・著述家の作品制作のアナロジーによって「創造」・「発明」を語る諸テクストを讀解し、ベルクソンの一見奇妙な形相質料論を、彼の特異な「創造」概念の表現として意義づけたい。

第一に「質料の創造」とは何か。Gouhier [1989] は、ベルクソンの「創造」は単にユダヤ-キリスト教的な宗教性から来るものでもなく、ギリシャ-ラテンの伝統に連なる哲学者たちが語るような内実を欠いた概念装置なのでもない、と注意していた。こうした観点からは哲学史との断絶においてベルクソンが描かれるが、われわれは形相質料論という道具立てのベルクソンの使用を浮き彫りにするため、あえて哲学史に身を置き直す。ここでは哲学史的な対照項としてアウグスティヌスを取り、ベルクソンにおける創造論が、形相の創造という時間的な生成と、その停止として位置づけられる、質料の創造という無時間的な生成という、「無からの創造」とは異なる「質料の創造」を語っていることを明らかにしよう。

第二に質料の先在の問題がある。ここでは、上で述べた「質料の創造」が可能である条件としてベルクソンが付した「形相の創造が純粋な場合」・「創造的な流れが瞬間的に妨げられる場合」(EC240)という二条件に着目したい。われわれは、「形相の創造が純粋でなく」「創造的な流れが瞬間的には妨げられない場合」の「質料の創造」として、「知的努力」(1902年、『精神のエネルギー』(以下 ES)所収)で描かれた「形相と質料との相互的適応」(ES182)によって成る「発明」概念を位置付ける。第一に問うた質料の創造を質料の理念的発生(cf.EC239)と名指すなら、第二に問うた創造は、質料のい

わば実在的発生であり、芸術作品の創造や発明の努力といった具体相のもとで、すでになされた質料と対話的に行われる「漸進的な質料化」(ES190)なのである。